（北海道の）子どもたちの今に

今本　明

⑴　（北海道の）とくくれない悲しさ

（北海道の）とくくれる特有の地域性は、もう見当たらなくなってしまった。それは、どの場所に限らず、今の日本にはなくなってしまったものの一つなのだろう。

以前は、社会の歪みやそこから生ずる問題が、先鋭化されて〝北海道の現実〟を覆っていると思うことがあった。中央から押しつけられた、あるいは切り捨てられた地方の痛みを感じることも多かった。その歴史の中でも、先住民のアイヌ民族から土地や生活を奪った悲しい事実。過去の大戦においては、本土防衛という視点から沖縄とともにいち早く切り捨てられた事実。更には国のエネルギー政策の転換のもとに、一方的に見放されていった炭坑の町の人々の生活。農業、漁業、林業の一大基地と持ち上げられながら、その後の見通しのない政策によって衰退させられていった各種の産業と、それに携わってきた人々のうらみ、つらみ。それらが生活の中で感じとれた時代は過ぎた。

良かれ悪しかれ、いま日本の地域は、〝横並び〟の状態の中であえいでいるように感じる。ひとことで言えば、均一化、画一化された社会が、「地域」を失わせた。それは、地域が本来持っていた〝独自性〟、〝個有性〟の喪失にほかならない。いま、児童文学の世界の中でも注目されるようになった「地域再生」の視点は、地域が持つべき〝独自性〟、〝個有性〟を、作品の中で取り戻していこうとする主張のはずだ。

もちろん、地域に住む子どもにも、この現実は等しく反映される。日本の中で厳しい現実にさらされている北海道で、貧困、差別、不登校やいじめの問題が、先鋭化して現れたのも当然だと考える。しかし悲しいことに、いまそれは、日本の中のどこの場所でも見られる問題となったような気がする。地域を失わせたものの代表は、テレビの普及やコンビニの出現、スマホなどの通信機器の浸透だろうが、それらはまたぼくたちが自ら選びとった生活の手段でもあ